白鳥に対する給餌飼料について

玉　田　　誠

I 見聞記録

1 瓢湖で

1979（S54）年3月13日、中橋康信会員の厚意で瓢湖を訪れる機会が得られた。思っていたより小さな湖でむしろ池といった感じであったが沢山のカモ類が共存していたのには驚いたりもした。吉川氏の給餌の様子も拝見でき感激を新たにしたが、文字通り「芋を洗う」ような採餌状況には一驚しながらも、かなりの量がカモの腹に納まってしまうように見受けられた。本田氏とも会談でき佐潟にも案内していただけて見聞を広め得たが、鳥屋野潟で見た白鳥は信じ難い程黄黒く汚れていて、ハクチョウではあるが白鳥ではない、などと話し合ったことを思い出す。

2 伊豆沼で

1982（S57）年1月31日の午前、伊豆沼は新田駅近くの給餌場での見学、濤沸湖とは一味異なった感じが沢山同居しているカモ類であることに気づき、瓢湖での状況とさしてかわりが無いように思えた。相当量の撒餌が彼女達の胃袋に納まってしまい、これでは給餌量も馬鹿にできず、その分だけ余計に給餌しなければ白鳥に満足してもらえまいと考えながら迫川へ向った。

3 最上川河口で

1982（S57）年1月末、伊豆沼での研修会の後、今は故人となられた阿部敏雄氏のお誘いを受けて同氏の車で奥羽山脈を横断して酒田に一泊、木島信一氏共々懇談することができた。翌2月1日最上川の様子を見聞、両氏の話しや観察の結果、ここでは給餌するとカモ（主としてオナガガモ）が白鳥をとり囲んでしまい、逐には白鳥を園外に追い出してしまい餌の大部分を横取りしてしまう始末であった。対策の一つとしてそのやや上流に第二の給餌場のようなものの設定を計画中とのことであったが、私としてはいっそのこと給餌を二、三年とり止めてオナガガモを散らしたほうが良いのではないかと考えたりもした。

4 阿武隈川で

1982年11月22日、福島駅に上竹氏の出迎えを受けて同氏宅に一泊、八木・斎藤の両氏も見えられ共に卓を囲んで歓談、旧交を暖めた。翌朝上竹氏の給餌状況等を視察させていただいた。自宅の裏庭で飼料をリアカーに積載して老夫婦は堤防へ、さらに河川敷へとかれこれ100メートル程押引していった。それを今度はプラスチック製の小舟に積み換えて、中州近くまで引舟してアンカーを入れて給餌していたが、これ程の苦労を他所で見掛けたことは無かった。一袋の重さは60才を過ぎたばかりの私でも気軽に取扱えなかったことを思い出す。ここでも亦最上川同様に相当の量がオナガガモの腹に納

まった様に思えたが、流れがかなり急なためか白鳥をとり囲んだりして餌をひとり占めするようなことはなかった。

5　中　海（白鳥海岸）

直接実状を見聞したわけではないが、1983（S58）年3月27日午前、濤沸湖で会合した京都の三宅博会員の話や「島根野鳥31号」のグラビヤ写真を見ると、白鳥海岸でも白鳥がオナガガモに囲まれている様子が良くわかる。これでは採餌が不可能になるばかりでなく、白鳥も恐れをいだいて給餌場に寄りつかなくなって、門脇氏の努力を水泡に帰さしめている要因はここにあるのではないかと愚考している。

6　濤沸湖では

濤沸湖ではここ数年来200－300羽のオオハクチョウが越冬を完了しているが、善意としての給餌はおこなっていない。厳冬期には天然の餌は皆無に近い水域であるから、観光客の投餌に依存しての越冬であり生活である。人間はおろか自動車が来ると集まって来るといった「条件反射」が身についてしまう程だから、この不特定多数の投餌への依存度のたかさが知れようというものである。カモ類が共存しないわけではないが、その数は全く微々たるものであり、ほとんどといってよい程投餌場には近寄らない。10年程前はかなりの数のカモ類も白鳥に対する人工給餌に依存している様子がうかがえたし、雪氷上に散餌していた頃ははカラスやスズメも結構恩恵に浴していたものであった。

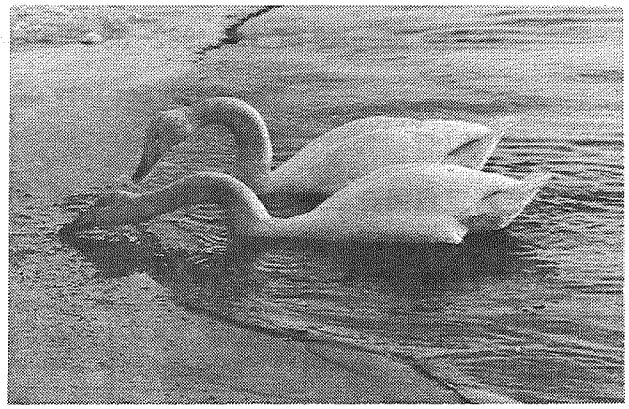
Ⅱ　考察と提言

前節でみた1－5の地域と最近の濤沸湖との間の違いは何に起因しているのであろうか。端的にいって、それは給餌物質のちがいによるものと考えられる。1－5での給餌物質は主としてシイナ・麦類・野菜を細かくきざんだ物であり、濤沸湖で与えられる物はパンの耳でありパン屑である。栄養のバランスの点からみれば、前者は数段後者に優れていることは明白であるが、また前者は善意に満ちた給餌であり後者は興味本意の投餌である。しかし、考えてみるまでもなく白鳥が食べるパンをカモ類が食べないということはないから原因は他にあることになる。それは大きさにある、ということに気付いたのは最近である。売店ではガサを増すために、雑に2等分－4等分して販売しているのである。耳であるために簡単にくいちぎれないことと、2－4等分された大きさがオナガガモ達にとって手も足も出ない、いや、くちばしをいれられない要因なのである。水につかって滑らかになり、ややふけたパン屑は白鳥なら一気に呑み込むことが可能なわけだがカモ類ではそうはいかないというのが実状なのである。最上川や瓢湖で越冬した経験を持った白鳥が混ざっていたら、この人間本位の投餌をどう評価するであろうか。「瓢たんから駒」のたぐいであるが、餌は100パーセント白鳥の腹に納まっていることだけは事実である。かってカラスやスズメ迄が恩恵に浴していた頃の給餌物質は燕麦であった。カラスは夕方になると塒に帰るので、その時点で給餌すれば岸辺の雪氷上に散布してもカラスやスズメに横取りされないことを見出したりもした。

カモ類がどうなっても良いとは思はないが、お目当ての白鳥の胃袋に納まる量が給餌量に対してあまりにも少ない様に見える現状やオナガガモなどの給餌場の不法占拠？、そして上竹老夫婦のあの御苦労

等を考え合わせると、1－5地域での給餌物質については一考してみる必要があろう。一、二年、試みにパンの耳を縦横二、三等分して与えてみてはどうだろうか、それなりの成果は得られるように思える。阿武隈川のような流れのかなり急な所では、それなりの対策も必要で、中州や岸辺等を整理して散布してやるのも一つの方法であろう。水に浸してえん下し易くしたり、ふやかしたりするテクニックなどはすぐみいだすようである。

白鳥が人間の善意を理解できたとしても、カモ類の横暴なふるまいには為す術をもたないから、遂には各給餌場を見捨てるようなことになりはしないか。最上川などで、白鳥が散在してしまった様に見える原因は、この間の事情をもの語るものではなかろうか。ヒトを頼ることなく安全に越冬できるのなら、それはそれなりに是としなければならないであろうが、白鳥にとっては死活問題であり、地域によっては人間生活とのかかわり上で新たな問題も生じかねないから、今の内になんらかの対策を講じなければならないのではなかろうか。



給餌に成功した初期の頃－首を延ばして岸辺の燕麦を採食するオオハクチョウ　　濤沸湖

1983年6月9日

◎ 島根野鳥　Vol.16 No／(No 31)　　1983年5月

◎ 標識鳥に関する二三のとりまとめと考察　玉田　　未発表